

駐入寺東慶寺と女人救済

一

柳

豊

勝

松岡山東慶総持禪寺。俗称、松ヶ岡東慶寺は鎌倉市山ノ内、すなわち、国鉄横須賀線北鎌倉駅より鎌倉街道に沿って徒歩数分のところにあり、古来より独特な寺法を執行し、「駈入寺」または「駈込寺」（かけこみ寺）といわれ、世に「縁切寺」として名高い。

東慶寺は、弘安八年（一二八五）、北条時宗夫人覚山志道尼により開創、開山された。開基は北条貞時である。覚山尼は秋田城介安達義景よしかずの女、母は北条時房よしかずの女である。建長四年（一二五二）七月四日、安達邸で生まれた。『吾妻鏡』に、

七月大 四日 丙戌 天晴る。午の刻、秋田城介義景が妻、女子を平産すと云々。堀内殿ほりうちと号するこれなり。

とある。松下禅尼は安達義景の妹であり、当時同じ安達邸内に住んでいたことから、少女時代にその訓育感化をうけたことと思われる。

『明恵伝記』によれば、承久三年（一二二一）承久の変に当り、明恵の居在した梶尾高山寺の山中に官軍の将士が多く逃げ入ったというので、秋田城介義景（辻善之助氏は安達景盛の誤としている）が山中に入って探索し、終に明恵をとらえて六波羅の北条泰時の前に引きすえた。この時、明恵は、

「この山は殺生禁断の地であり、鳥でも獣でもここえかくれて命を続ける。さればこの山へ逃げこんだ兵士を追いつ出すわけにはいかぬ、わが身がどうなろうとも」

と、権門にも屈せず威武にもおそれないで時の執権泰時に対しても、堂々その所信を抜いて大義を明らかにした。泰時これより深く明恵に帰依したという。

これは有名な話であるが、高山寺にしろ、高野山にしろ、寺は一種の治外法権の特権があり、軍兵が走入したと

もある。この明恵の話を堀内殿は兄から聞いたことと思われるが、これが後に、駈入寺を作る彼女の生涯の上に大きな影響をおよぼすと考えられる。（東慶寺住職井上禪定師著『駈入寺 東慶寺史』一九八〇年春秋社発行）

文永五年（一二六八）三月、時宗が執権となり、政村が連署となった。このとき時宗は十八歳であったが、彼は北条家の嫡男得宗である。この時一月、高麗の使者が来て、蒙古・高麗の国書を差出した。そこで得宗の時宗を主脳とした国防上一致協力体制を以て、蒙古と対決しようとするものであった。これより文永・弘安の蒙古襲来は時宗一生の大事件となる。

文永十一年（一二七四）十月、および弘安四年（一二八一）五月の二度にわたる蒙古の来襲は、幸いにわが将兵の勇戦と颶風のおかげで、わが国土は元軍の馬蹄に蹂躪されず、わが軍大勝することが出来たが、執権就任以来十五年の長きにわたり、時宗は一生この国難に対決せねばならなかった。

覚山尼は弘安七年夫時宗の臨終の際、落髪付衣、覚山志道大姉と安名した。

北条貞時は、時宗のあとをついで、弘安七年十四歳で執権となった。翌弘安八年十一月十七日、貞時は安達泰盛、宗景父子を攻めてこれを殺し、また一族金沢時頭を上総に流した。これを霜月騒動という。泰盛は覚山尼の兄であり、幼少父亡きあとその養女となった。この騒動で実家安達家が滅亡している。

覚山尼は徳治元年（嘉元四年、一三〇六）十月九日に寂した。

東慶寺五世は、用堂尼と伝える。後醍醐天皇の姫宮で応永三年（一三九六）に寂したと『過去帳』に記されている。『由緒書』等には、この尼公住持以来「松岡御所」と称し、比丘尼御所同格紫衣寺なりとある。

東慶寺二十世天秀法泰尼は豊臣秀頼の女である。元和元年大坂城落城によって秀頼は死に、七歳の幼女は捕えられ

た。『由緒書』によれば「大坂一乱之後、天樹院様（千姫）御養女に被為成、元和元年権現様依上意当山江入薙染、十九世瓊山和尚御附弟に被為成」とある。

『由緒書』や『旧記』によると法泰尼入寺に際し、家康から希望を問われたのに対し、開山よりの寺法断絶なく永く相立てば、これにすぎた願いはないと答え、これが許され、江戸時代を通じて寺法が維持されたものという。しかし、正保二年示寂というから元和元年に八歳であった法泰尼に、このような挨拶は出来そうにもないと思われるし、翌年家康は死亡しているので、この話も事実の程は疑わしい。井上禅定師は養母天寿（樹）院千姫等のとりなしによるものであろうといわれている。（『駄入寺東慶寺史』）

駄入寺法

徳川時代の離婚は一方的な「追出し離婚」であった。すなわち、夫は「三くだり半」の離縁状一本で妻を追い出すことができたのだが、妻は法律上の離婚請求権がないのみならず、道徳上もあるまじきこととされた。甚しい片手落ちな制度であり、女の地位はきわめて悲惨なものであったが、ここにただ一つ、妻が離婚を請求してその目的を貫徹し得る手段があった。しかしこれは最後の非常手段である。徳川幕府の法制を摘録した『律令要略』に、

『夫を嫌ひ家出致し、比丘尼寺へ駆け入り、比丘尼三年これを勤め、暇出で候ふ旨これを訴ふるにおいては、親元へ引取らず。』

とある。これが「縁切寺」であって「かけこでら駄込寺」とも言う。江戸時代の川柳に、『引つからむ縁をかき切る鎌の寺』と言う程、東慶寺は縁切寺として有名である。

東慶寺は「松ヶ岡御所」と呼ばれる格式の高い寺である。この寺の格式が高いということが、縁切寺の働きを強力

ならしめる。すなわち、幕府官憲も手を入れることのできない治外法権の場所であり、女が逃げ込んだら男が踏み込んで引きもどすことのできないの言うまでもない。そして寺で三年間、のちには足かけ三年、尼をつとめれば、男との縁が切れて自由の身になる。というきまりである。しかし、実際はそこまでゆかずに解決する場合が多かったようである。すなわち、女が駆け込むと、どうせ夫か里の父親が追っかけて来るだろうし、もし来なければ寺から召喚状を出して関係者を呼び寄せ、寺役人が双方の事情を聴いた上で女が我儘ならば説諭して夫なり親なりに引き渡し、女の言い分がもっともならば、夫を説得して離縁状を取ってやる、そしてどうしても話がつかない場合に寺に置いて足かけ三年の年明けを待たせる。ということになる。川柳に『縁切るにや鎌倉どのがうしろだて』『鎌倉の厳命にしたがい離えん』ということである。ちょうど離婚裁判所、現在の家庭裁判所の機能をもっていた。

東慶寺の縁切寺法、駈入寺法については、既に、古く穂積重遠博士が『離婚制度の研究』を発表され、また、現東慶寺住職井上禪定師がその著『駈入寺東慶寺史』に詳しく研究発表されている。

東慶寺に残存する古文書には、時宗夫人が尼となり東慶寺を創建し、離縁の寺法を立てたとあるが、井上禪定師によれば、覺山尼の女人救済の寺法の創始は、罪人免許のアジールの性格であり、華嚴の写経と禪の実践の中から生まれ出た慈悲行とされている。

旧約聖書に、『生命にて生命を償い、目にて目を償い、歯にて歯を償い、手にて手を償い、足にて足を償い、焙にて焙を償い、傷にて傷を償い、打傷にて打傷を償うべし。』（出埃及記二二章二三―二五）とあり、被害と同程度の害を加えて仇を報いるいわゆる「反坐」の主義があらわれている。

古代のユダヤ人の生活においては、このように当初は復讐によって社会の秩序が保たれていたが、そのうちだんだ

んと復讐の弊害がいちじるしくなり、人文が進むにつれて社会一般がその過酷・不合理に気がついてきた。すなわち、利害愛憎の渦中に在る当事者間においては、ときに復讐が適当な程度と範圍とを越えることもあり、かえって社会の安寧秩序を害するところから、だんだんと復讐に制限を加えるようになってきた。旧約聖書に出ている「逃遁^{のげれ}邑^{まち}」の制度は（出埃^{エジプト}及記二一章一三、民数紀略三五章一〇―二九、申命記一九章二七、約書^{ヨシュア}卅記二〇章）、復讐制限の一例である。「逃遁邑」は、英訳聖書には「シティー・オヴ・レフュージ」とある。すなわち「避難場」である。

旧約聖書によれば、エホバ神がモーゼに

『逃遁の邑を定めて、誤りて知らずに人を殺せる者を其^そ処^こに逃れしめよ。是は汝らが仇打する者を避けて逃れるべき処なり。』

と教えた。ということになっている。その逃遁邑は適當の間隔を保つて六つ設けろ、というのである。これは、過つて人を殺した者が故殺・謀殺の殺人者と無差別に復讐されては過酷・不公正だ、と気がついたところから、こうした逃れ場所ができるようになったのであって、社会生活の必要から生れた制度であった。すなわち、人を殺したためにかたきよばわりされる者を逃げこませるのだが、そういう避難場の数が少くまた道が遠いと不便だから、ヨルダン川の右岸・左岸にそれぞれ三つずつ、適當な間隔をとつて六カ所の逃遁邑を設けるのである。

ところで、どういう人が逃遁邑に受け入れられるか、だれがそれを判定するかというに、旧約聖書に

『素^{もと}より惡^{にく}むことも無く知らずしてその隣人^{となりびと}を殺せる者、例ば人木を伐らんとてその隣人とともに林に入り、手に斧^とを執^とりて木を伐んと撃ちおろす時に、その頭の鉄柯^{てつ}より脱^ぬてその隣人にあたりて之^{これ}を死^ししめたるが如きはなり。……恐^{おそ}らくは復仇^{ふくしゅう}する者心熱してその殺人者^{ひつしうし}を追かけ、道路長きにおいては遂に追しきて之を殺さん。然るにその

人は素より之を惡みたる者にあらざれば、殺さるべき理あらざるなり。』

とあつて、故意と過失とでは責任がちがう、という問題が持ち出されている。そして

『斯る者は是等の邑の一つに逃れゆき、邑の入口に立てその邑の長老等の耳にその事情を述べし。然る時は彼ら之をその邑に受けいれ処を与へて邑の中に住しむべし。假令仇打する者ゆくとも、彼らその人を殺せる者を之が手に交すべからず。』

ということになる。旧約のユダヤは長老政治なので、長老たちが避難者收容の適格審査をするのである。

この逃遁邑の長老たちの審判が今日で言えば裁判であつて、裁判のめばえはこのようにして発生したものと想像される。そしてこの原始裁判が重なると、

『もし鉄の器をもて人を撃て死しめば是故殺なり。故殺はかならず殺さるべし。……また人を殺すほどの木の器を執りて人を撃て死しめば、是故殺なり。故殺人はかならず殺さるべし。……もし又怨恨のために人を推しまたは意ありて人に物を投うちて死しめ、また敵の心を挟さみ手を以て人を撃て死なしめなば、その人を撃ちたる者は必ず殺さるべし。是故殺なればなり。……然どもし敵の心なくして思はず人を推しまた意なくして人に物を擲ち、または人あるを見ずして人を殺すほどの石を之に投つけて死なしむること有んに、その人これが敵にもあらずまた之を害せんとせしにもあざる時は、……その人を殺せる者を仇打する者の手より救け出すべし。』

というような、故殺と過失殺とを区別しそれぞれの標準を示す法律が発生発達するのである。

寺院に逃げ込めばいかなる大罪人も刑罰をまぬがれる。というような事からは、洋の東西、諸国の古代にあつたらしい。

アジール (Asylum 原意は罪人、負傷者をかくまった教会内の避難所。) は、日本でも、中世に高野山等に「遁科屋」

(とんかや) というようなものがあって、罪科から遁れた者の避難所があった。前述の高山寺や、京都の大通寺、福島県三春の福聚寺、鹿児島福昌寺等に犯科人が走入して救われる例が見られたが、江戸時代になると、それらの特権は認められなくなり、このアジールの性格を最も端的に示す「駆入寺」なる独特の語を以て呼ばれるのは、この東慶寺のみとなり、縁切寺としては、東慶寺の他に、もう一つ上野徳川こうづけの満徳寺と、二つのみとなった。

この東慶寺でいつから縁切寺法が行われたのか、寺例書では開山以来としたい、五世用堂尼の足かけ三年の話や、二十世天秀尼が寺法擁護の話が伝えられるが、東慶寺に残存する縁切文書で最古のものは元文三年（一七三八）離縁証文である。これは東慶寺の寺法を示す最古の文書である延享二年（一七四五）の寺例書より七年前のものである。

この東慶寺に残存する寺例書には、年記はなく、ただ六月としてあり、端裏に下書とある。もう一つ、延享二年（一七四五）十月、東慶寺役人村上嘉太夫が差出した書付というのがあるが、前の六月のが、この十月の寺例書の下書であろうと、禪定師は述べられている。

六月の寺例書の要点は、

- 一、時宗夫人が尼となり東慶寺を創建し、離縁の寺法を立てた。
- 二、後醍醐帝の姫宮用堂尼が住職した。
- 三、秀頼の息女天秀尼が家康の命で住職し、何か願いはないかと聞かれて、旧例の寺法断絶なきようと挨拶した。
- 四、駿河大納言の御殿を寄付、修復金、法事料が下付された。
- 五、住職は足利家より代々出て、今は足利の正流喜連川家の息女が相続する。
- 六、寺法の儀は、開祖以来、夫を嫌う女が駆入れば離縁をする。

女は心のままにならず、悪道の者にも一生随い、しかたなく一生涯を終えることがあるのを憐まれて、開山尼が

立てた寺法である。

1 女子駈入のときは随分吟味を致し、熟縁（復縁）するようにいろいろ申し聞かせ、それでもどうしても離縁を願う上は、よんどころない訳承届（ききとけ）（中断）

2 寺法に違背した者は、御支配所へお届けして、離縁仰せつけられ相違なくすまして来た。

3 女子勤めの儀は女の願いで離縁したのだから、夫へ対して、苦勞な勤め二十四ヶ月の間、寺内でつとめさせ、寺法が明いたらば親元へかえし、再縁に支障ないようにする寺法である。

七、公儀御法式にそむいた者はかかえない。万一やむをえぬわけで抱えたときは、伺って申し渡す寺法である。右のような者は相立ちがたき儀にて駈入ったので、寺の門から出せば自殺しようという覚悟で、歎願するので、慈悲救済のための寺法、出家の身として見すてがたく、抱えるときは、お伺い申し上げる。しかし、今までそのような者を召抱えたことはない。

八、駈入のとき、以前には離縁証文も差出させず、当山へ入って勤めれば、縁は切れたのであるが、下山した女へ、もとの夫が難題をもちかけ出入（訴訟沙汰）になったので、先年寺社奉行永井伊賀守の仰付けで、これからは親と夫方へ東慶寺役人より駈入女のことを届け、きつと離縁状を差出させるようにといわれて、それ以来は縁切証文と親元の証文をとっておくことにした。

以上。

次に、十月の寺例書での寺法について、

一、東慶寺法の儀、元祖覺山和尚より四百四十有余年来、只今まで相立って来たが、みだりに相抱えるのではない。以下は前と大差はない。

1 よく吟味をし、駈入女子のほうにも熟縁するように教化するが、どうしても承知しないで縁切りを覚悟の女を、是非なく相抱え、その上、親父（夫）方へその訳を申しつかわし、

2 存じ寄り（意見・考え）があるなら、名主・組の者を召しつれて寺役所へ来て申すべし。

3 訳寄り（事情）いよいよ相違なかったら縁切証文を差し出させる寺法である。

4 しかしながらほかに申し達したいことのある者は寺へ召し呼び、意見を再応聞き、その理が立つなら、今後夫婦むつまじく暮らすように申しふくめ、双方（実家・夫方）の名主・組・親類共まで和談の上、別心なしという証文を差出させ、駈入女を相渡し帰す。

5 そうでないのは、夫方より永く身を構^{かま}われて（束縛され）、一命をも捨てるようになる者を、慈悲のため、寺法をもって縁切らせ救い申す。

非道に（無理に）離縁させるわけではない。末々不熟縁と思うので、永く苦しむのが不便^{ふびん}（あわれ）と存じ、寸志の憐みをもって寺法を相勤める。

二、欠入女の儀、以前は夫方より証文も差出させず、当山へ入り寺法を勤めれば縁は切れたのであるが、二十四ヶ月すぎて下山した女へ、元の夫が云々（以下、六月のとはほとんど同文、中略）。

寺社奉行永井伊賀守様の仰付でそれ以来は縁切証文を取り置く。

右の通り東慶寺代々の留書である。此度差出すようにとの仰渡しにつき抜書して差上げ申す。

以上。

とある。江戸時代の文書ではこのように云っているが、それ以前の古い時代のもので駈入寺法を裏付ける資料は見あたらない。

古来より、ともすれば仏教の救いから取り残され、差別をもってあつかわれてきたのが女性であった。仏教のなかにみられる五障・三従、煩惱深重という女性観が、女性と男性を仏教の世界で差別させたのである。日本における女人成仏・女人往生の実態は、古代・中世・近世のそれぞれの時代によって異なっている。奈良・平安以来の諸山寺は、女性が地獄の使者にも等しい存在であり、五障・三従という成仏への障りを生れながらにして身につけているがゆえに、結界して女性を最後の一线で差別しつづけてきたのである。女性は男性に比べて、はるかに重い煩惱や業障を身にまといっていると規定されるが故に、古代はもちろん、中世・近世にいたっても、とりつづけたのである。

笠原一男氏はその著『女人往生思想の系譜』のなかで、仏典にあらわれた女性観を通じて、仏教の世界における女性の扱いについて、次のように述べておられる。

まず『涅槃経』にはつぎのような言葉がみえている。

「あらゆる三千界の男子のもろもの煩惱をあはせあつめて、一人の女人の業障とすなり」

三千界にある男の煩惱をすべて集めたものが、一人の女性の業障に等しいほどに、女性の煩惱と成仏への障りが深いというのである。

また、同じく『涅槃経』では、

「女人は大魔王なり、よく一切のひとをくらふ、現世には纏縛をなし、後世にはあだ・かたきとなり」

女性は大魔王であって、一切の人を食いつくし、この世においては男にまつわりつき、後生という点では成仏の障りとなり、仇・敵となると女性を見ているのである。女性は此の世、来世ともに男子の成仏への障りとなるといっている。

『心地観経』では、

「三世の諸仏のまなこは大地におちおつとも、法界のもろもろの女人はながく成仏の願なしとなり」

前世・今世・来世の三世にわたっておわします諸仏の眼が地に落ちて腐りすたれることはあっても、法界のもろもろの女性が成仏する願は、永久に存在することがないというのである。まさに、女性は過去・現在・未来を通じて成仏は不可能といっているのである。

『優填王経』では、

「女人もともと悪難をなすこと一なり、縛著してひとをひいて罪門にいるなり」

女性が悪難をなす最大のものであり、男にまつわりつき、男を罪の門につれてゆくのが女性であるといっている。

ついで『宝積経』には、

「ひとたび女人をみればよくまなこの功德をうしなふ、たとひ大蛇はみるといふとも女人をみるべからずとなり」
男が、一度女性を見れば必ず眼の功德を失ってしまう。だからたとい大蛇は見てもよいが、女性を見てはならないというほどに、仏教の修行において女性を嫌わなければならないことを説いている。

『阿含経』では、

「ひとたび女人をみればながく三途の業をむすぶ、いかにいわんやひとたびおかしぬるにおいては、さだめて無間地獄におつとなり」

男子たるものが一度女性を見れば、永久に墮地獄の業をむすぶことになるのである。まして、一度、女性を犯した場合、必ず無間地獄に墮ちるといのである。このように女性というものは、男子の仏法修行にとって近づけてはならない存在と見ている。

『智度論』にも、

「清風のいなきを、なをとりつべし、蚯蚓の毒をふくめるなをふれつべし、剣をとりてむかえるかたきにはなをかちぬべし、女賊のひとを害するは禁ずべきことかたしとなり」

清らかな風は無色で目に見ることが出来ないが、それでさえ、あえて捉えようとすれば捉えることができる。毒をもった蚯蚓でさえも、あえて触れることができる。剣をもつて向ってくる仇にさえ、手段をこうじて勝つことができるのである。しかし、女性が人を害する悪心を防ぐことは困難であるといっている。

『唯識論』では、

「女人は地獄のつかひなり、ながく仏の種子をたつ、ほかのおもては菩薩にいたり、うちのこゝろは夜叉のごとしとなり」

女性は地獄の使者であつて、永久に仏になるべき種子を断ち切ってしまった。そして外面は菩薩に似ておだやかであるが、その本心は夜叉のようであるといつて、女性を警戒し、遠ざけることを仏道修行者に教えている。

つぎに、仏典ではないが、叡尊の「女人出家事」には、釈尊の弟子阿難尊者が摩訶波闍波提（仏を乳養した姨母）の出家を如来に請うた時の如来の言葉として、「女性の出家を許すことは、五百年間の仏法を滅すことになるゆゑに、これを許さない」と、いつている。

以上のように、仏典の世界においては、女性は修行者を地獄に墮させる使者といった考えが見られる。仏道を求める僧にとって、女性が最大の障りであり、なにもものにも勝つて疎外し、拒絶すべきものという立場に立っていた。

仏道修行の世界では、女性の立ち入りを拒否しなければならないといった思想を仏典のなかに見ることが出来るのである。さらに女性は、男子の成仏・往生の最大の障りであつただけではなく、女性自身が成仏・往生という点で、生れながらにしてその条件を欠いていたと見るのが、日本の仏教の女性観でもあつた。

女性の性^{さが}が男子の仏道修行において最大の障りとなるとみる日本の仏教の女性観に基づいて、諸山寺は女性を結界して立ち入りを固く拒絶するという態度を頑^{かたくな}にとり続けた。女性は男子にとって地獄の使者と見る言葉を肯定する態度のなかに、女性拒否の思想的背景の一端が如実にうかがえる。それに加えて五障の障りを内的に身につけ、三従の障りを外的に余儀なくされているがゆえに、女性は僧侶集団の修行の場たる諸山寺から拒否されたのである。奈良仏教・平安仏教の諸山寺は現実に古代を通じ、さらに中世にいたっても女性の立ち入ることを結界して拒否しつづけたのである。

中世鎌倉時代、古来からの諸山寺が結界して女性を拒否しつづけている実情を、法然は、『無量寿経釈』のなかで、つぎのように述べておられる。

この日本において極めて貴い無上の霊地・靈験の場所は、皆すべて女性の立ち入りを嫌っているというのである。

そして、その具体例として、比叡山・高野山・東大寺・崇福寺・金峰山・醍醐寺などがあげられておる。

比叡山延暦寺は伝教大師最澄の建立するところで、桓武天皇の御願寺である。伝教大師みずから結界して、谷を区切り、峰を限って、女性の姿の入るのを拒否している。一乗の峰高く立ちはだかって、五障の障りを身に具した女性が入り立つこともない。また、一味の谷が深く切りたって、三従の障りをもつ女人の入りが来ることがない。女性は、比叡山の薬師医王の霊像のご利益を耳に聞いても、直接に叡山に登って目で見ることが許されない。伝教大師の結界の霊地を遠くから見ていただけで、そばに行ってみることができない。こうした女性拒否は叡山だけでなく、高野山も同じであった。

高野山は弘法大師空海が結界して女性を拒否している峰であり、真言大乘の教えが栄えている聖地である。三密

(身・口・意)の月輪はすべてを照らすといっても、成仏の資質のない女性を照らすことがない。五瓶の智水はすべての人間に平等に流れるといっても、垢に穢れた女性の身にはそぐことがない。叡山・高野山においてさえ、女性に仏法のすべてを開放するという点においては、なお障害があるのである。ましていわんや、出過三界道の浄土において女性を差別し、拒否するのは当然ではないか、と述べられておられる。

さらにつづいて、東大寺が女性を拒否する有様について、

聖武天皇の御願によってつくられた十六丈金銅の盧舎那仏は、女性はこれを遠くから拝むことはできるけれども、決して大仏殿の内に入って拝することは許されないというのである。ついで、天智天皇の御願によって、天智天皇の七年正月に近江国志賀郡長等山に建立された崇福寺の本尊、大和国にある金峰山、京都郊外の醍醐寺など、ひとしく結界して女性を拒否している。この実情をふまえて、法然は、女性と仏教との関係について、女性は悲しいことには両足はあるが、登ることの許されない法の峰あり、踏み入ることのできない仏の庭があるといっている。また、恥かしいことではないか、女性は両眼ははっきり見えるけれども、見ることの出来ない霊地があり、拝むことのできない霊像があるのだという。そして、この穢い娑婆の瓦礫や荆棘の山のような諸山寺、泥や木でつくった粗末な仏像でさえ、女性が立ち入ることや拝むことに障害があるのである。まして、もろもろの宝でつくられている浄土、あらゆる徳をそなえている仏を、女性が成仏・往生して仏国土に行き見て見ることができようか、と述べられておる。

また、諸山寺が女性を結界して拒否していることによって、道元も「日本国には一つの笑うべきことがある。いわゆるあるいは結界の地と称し、あるいは大乘仏教の道場だといって、比丘尼や女性たちの入ることを拒絶している。このような間違った風習が永く伝えられて、人々はその邪正をわきまえていない。学問をして物ごとをわきまえてい

る人も、この風習をあらためることなく、物ごとに通じた人もこのことについて考えることがない。あるいは権現のなすところと称し、あるいは昔からの遺風といって、なに一つその邪正を論ずることのないことは、もしこれを笑えば腸もよぢれるほどである。権現とは一体何者か、賢人なのか聖者なのか、神か鬼か、十聖か三賢か、仏と殆ど同じ証を得た等覚か、仏の証を得た妙覚か。また、古いものを改めてはならないのならば、生死流転を捨ててきることとはできないであろう。」と、結果して女人や比丘尼を拒否することを邪風として批判されている。

けだし、女性の成仏を嫌い、女性を男子と平等にあつかわないのは古代仏教の世界では常識ともいえる有様であったといえる。女性 は男子の仏道修行において最大の障りであり、しかも、女性自身に成仏の可能性なく、三世十方の諸仏から成仏・往生を見放された存在であった。このような女性が、現実には古代仏教の修行者の集団である奈良仏教・平安仏教の諸山寺から疎外され、拒絶されたのは当然といえる。

江戸時代より以前、鎌倉時代および室町時代の駆入寺法に関する史料は現存しない。ただわずかに、室町末期に製作されたと推定されているお伽草紙類の『唐糸草子』の中に「松ヶ岡」が出てくる。これは万寿姫の説話を扱ったもので、物語りであるので話に出てくる頼朝の時代に松ヶ岡が存在したとか、女人救済の寺法を行っていたというような証拠にはならないが、この草紙の作られた時代の松ヶ岡尼寺では、すでに女人救済の寺法を行っていたこと、それには時の將軍といえども手が出なかったという勢威があったこと。縁切りよりも罪人をも保護する寺法であったこと。などが推察される。

東慶寺の開山系図の覚山尼の条に「後宇多院ならびに鎌倉將軍、罪人御免許の勅書、御教書下賜」とある。ここに罪人御免許とあるのは、中世の杜寺は治外法権があり、罪過ある者が逃れ入れば免許される慣習があり、東慶寺に

も、その特権が幕府や朝廷の保護の下に強く行われていたといえよう。

男子専制で女子は五障・三従の障りを具するが故に拒絶されている姿に、覚山尼が寺法創設にあたって、女身ゆえの非力をかこちながらも、自らが女であるから、せめて女人の救済として、この東慶寺を独特な尼寺たらしめたのである。覚山尼に明恵や円覚開山無学和尚が強く影響して利他大乘の行願として女人救済の寺法が発現したものであり、それは華嚴の写経と禪の実践の中から生まれ出た慈悲行といえよう。

覚山尼が夫時宗に死別して華嚴写経に専念したところに霜月騒動がある。文永・弘安の二大国難はさておき、和田の合戦、三浦の合戦、二月騒動、それに霜月騒動と、戦乱相次ぎ、肉親相討ち、叛服つねなき修羅のちまた、しかもすべてが安達家につながり、執権夫人たる彼女自身につながる輪廻の世相を見る時、修禪の正眼と、華嚴の身読より、あるべき世界、正しき社会、仏国土の建設の第一歩として、弱き悲しき女性救済の寺法が創立されたのである。執権の母という強大な地位がこの悲願の実現を容易にしたといえよう。さらに五世用堂尼が後醍醐天皇の姫宮という地位が、またこの寺法の擁護に大きな力となったといえよう。

秀頼の遺女天秀尼が、大坂落城のあと、東慶寺にあずけられて尼となるのも一種の女人救済である。

『鎌倉市史』に、西洞院時慶鎌倉に遊ぶ、くだりとジョン・セーリス鎌倉を過ぎる、記述がみえる。

慶長十八年三月、にしのおういんとせよし西洞院時慶はその子時直とともに京都から駿河に下って家康に会い、ついで江戸に行つて秀忠にも会ったが、その帰途鎌倉見物した。その時の日記に、松岡は尼衆・遁世者が多いとある。これはこのころすでに縁切寺として駆込んでいたものがあつたかも知れない。と述べられている。

また、慶長十八年には九月、イギリス船のキャプテン、ジョン・セーリス (John Sayres) が駿河へ来て家康に会つて国書を呈し贈物をしたが、そこから江戸へ行つて秀忠にも会った。そのときのことの彼の航海日記に見えてい

る。そのなかで東慶寺に関して、「秀頼様の幼い娘がこの僧院で尼となってわずかにその生命を保っている。ここは聖所であって、法令の力でも彼女を連れ出すことはできないからである。」と、その治外法権をはっきり述べている。すでに、この時代、松ヶ岡尼寺では女人救済の寺法が行われ、それは縁切よりも罪人をも保護するという、アジールの性格の寺法であったことが広く世に知れわたっていたものと思われる。

東慶寺開山覚山尼による女人救済の寺法の創始は、仏教慈善救済史上、秀れて顕著な事蹟というべきである。しかるに、名著といわれる辻善之助氏による『慈善救済史料』には、これが欠落し見い出することができない。いずれ機会を見て補填さるべき要があるうか、とも思われる。

天正十八年四月、秀吉は小田原攻めに際して東慶寺に「軍勢甲乙人等乱妨狼藉事云々」の禁制を下しておる。當時、東慶寺は建長寺・円覚寺とともに「鎌倉三ヶ寺」と呼ばれ、寺格も高かった。秀吉は北条氏を滅ぼすと、その旧領を家康に与え、小田原より会津に向う途中鎌倉に立寄り、鶴岡八幡宮に詣で、同宮、建長、円覚、東慶寺などの所領を安堵した。また、家康も東慶寺に寺領を寄進した。この寄進領は、百十二貫三百八十文であり、この御朱印領は江戸時代を通じて代々の将軍が引つぎ代替り毎に朱印の安堵状が出て明治の土地まで保証されてきた。鎌倉は古例で永高で呼ばれた。当時「永（永楽銭のこと）二十五貫文を以て百石と唱へ来り候」とあるから約四百五十石である。これは八幡宮（八四〇貫）、円覚寺（一四四貫八八文）につき建長寺（九一貫九五〇文）より多い。東慶寺は室町・小田原以来、徳川期にも、寺領の上では大寺である。

元和元年（一六一五）五月、大坂落城の後、秀頼の子八歳の国松は京都六条河原で斬られた。七歳の女子は家康の

命により東慶寺に入れられ、十九世瓊山法清尼の付弟とされた。秀頼と千姫との間の子ではなく、成田氏五兵衛助直女の子であるが、千姫の養女として寺入した。これが二十世天秀法泰尼である。家康は秀頼の遺児の処分には腐心したであろう。男児は斬ったが、少女をそうはできぬ。さりとて野に放てば大坂の殘党がかつぎあげるかも知れない。そこで男子禁制の寺法嚴重な東慶寺へ預けて尼とし、「鎌倉新御所」と称させた。寺記によると、天秀入寺に際し、家康が文にて「何か願いの筋あらば心おきなく仰上らるべし」といった時「別に望みもないが、開山よりの寺法断絶なく、永く相立てばこれにすぎた願いはない」と挨拶したので「望みにまかせる」と許され、この特権が「権現様の御声がかかり」で、これから江戸時代を通じて寺法行使の上に大きな効力となった。

天秀尼については、「会津城主加藤明成一件」がある。加藤明成とは、賤ヶ岳七本槍のひとり孫六喜明とて小田原攻めや朝鮮の役に水軍の将として軍功があり会津若松四十万石を領した名将の子である。寛永八年（一六三一）家督を継ぐも不肖非理、老臣堀主水忠諫するも聞かず、ついに主従の間隙を生じ、主水は十六年出府して主君の罪を訴えたので、明成大いに怒り、これを捕えようとし、主水は高野山に走入し、その妻子をこの東慶寺に預けた。明成は家光に乞い主水を賜りこれを殺した。『東慶寺考』その他によると、明成は人を鎌倉に遣わし、東慶寺にかくれた妻子を捕えて殺さんとした。時の住持天秀尼大いに怒り、古来よりこの寺に来る者いかなる罪人も出すことなし。しかるを理不尽の族無道至極なり、明成を滅却させるか、この寺を退転せしむるか、二つに一つぞと、これを天寿院千姫に訴えて、寛永二十年（一六四三）幕府ついに明成の城邑を没収、家光、嘉明の功をおもって、その子明友を、石見安濃（現、大田市吉永）に封じて一万石を与えた。これが事件のあらましである。明成は直接には男子不入の東慶寺の寺法を犯したため天秀尼の抗訴により四十万石を棒にしたのである。天秀尼は入寺に際し、寺法の保護を要請した。はたして、この大事に遭い一身をかえりみず女性擁護の寺法を守った。養母千姫は時の將軍の姉であり、当時江戸城

内竹橋の天寿院に尼となって住んでいた。その援助も大ではあったことであろうが、女人の身で大國の城主を相手にその権利を主張し、これを貫徹したことは日本女性史上まことに稀有のことである。この加藤明成改易の一件は、東慶寺史の上でも寺法の上でも、興味深く、かつ重大な事件である。

天秀尼入寺以来、千姫をとおして徳川家と特別な俗縁上の関係から松ヶ岡御所の格式は一段と高くなり、登城の折には金紋先払で大名の行列も道をゆずるの例であったと寺記にある。

群馬県新田郡世良田村字徳川の満徳寺は、千姫により縁切寺法がはじめられたと伝えられる。同寺の縁起によると、徳川家の先祖とされる新田義季の女義姫こと浄念開山の時宗の尼寺で、徳川家の菩提寺である。

満徳寺の縁切寺法は開山以来で、古くは、駈入女は尼になる寺法であったが、大坂落城後、千姫が本多家への再婚に際し、千姫の侍女刑部局が身替りにこの寺に入り、中興開山俊澄上人となり、その由緒から江戸城内千姫の天寿院より住職三代相統、駈入女は三ヶ年寺入し、髪を切り夫へつかわし離縁状を受取る縁切の寺法がはじめられ、離縁の上、他へ再嫁することは千姫の例にならうとある。すなわち、千姫が入寺し離婚の上再婚した例にならうと、駈入り女が離婚の上再婚できる寺法が成立したというのである。

天秀尼が東慶寺の寺法永続を家康に願ったといわれているが、井上禪定師は、それは千姫であつたらうと説かれ、千姫再婚の理論づけにも、また縁切寺法は有力な支持となるから、千姫が東慶寺の寺法を熱心に支持し、家康にもその擁護を強く願ったことであろう。そして東慶寺にならない徳川の菩提寺たる満徳寺に千姫再婚のお福分けとした。縁切りの寺法が新しく行われるに至ったものと思われる。

つまり、東慶寺は駈入寺であり、満徳寺は縁切寺である。高木侃氏の『縁切寺満徳寺史料集』によれば、満徳寺に

は内済帰縁・内済離縁（和談成立）文書類が多く残存し、寺役人による調停が行われたことがわかる。東慶寺・満徳寺は、ともに江戸時代における徳川幕府の権力を背景とした女権保護機関であった。東慶寺はわが国家庭裁判所の始まりであり、満徳寺は家事調停の始まりともいうべきである。ともに千姫に因縁するものとして興味が深い。

東慶寺を最も良く物語るものは、川柳である。江戸時代、松ヶ岡の川柳は日本中のどの寺よりも、その数が多い。松ヶ岡東慶寺の川柳は、

沢田薫『縁切寺一川柳松ヶ岡』二六六句

穂積重遠『離縁状と縁切寺』一七九句

小丸俊雄『縁切寺松ヶ岡東慶寺史料』三四四句

田中彦十郎『ずいひつ縁切寺』三三九句

（井上禅定著駈込寺東慶寺史所収）ざっとみても以上のような数であるが、その中でおもなものをあげれば、

出雲にて結び鎌倉にてほどこき

縁談は出雲破談は松ヶ岡

相州と雲州嫁の会者定離

書置のこと南無三と十三里

縁なき衆生を済度する松ヶ岡

七去のほかにもう一つ松ヶ岡

松ヶ岡男のためのまづいところ
松ヶ岡男の意地をつぶすところ
松ヶ岡女のひとり行く所
板橋で別れ鎌倉まで行かず
まづ榎それでいけぬと松で切り
榎でもいけぬと嫁は松で切り
榎でもとれぬ去り状松で切り
鎌倉に居ないと事がむつかしい
ひつからむ縁をかききる鎌の寺
根のからむ松茸嫁は鎌で切り
鎌倉へ行く前川ですでのこと
鎌倉の前に二三度里へ逃げ
道中記何にするのか嫁は買ひ
奥の手は鎌倉道を知ってゐる
鎌倉へ行くと火箸で書いて見せ
かまぐらのさばきを受ける気の強さ
高砂にいびられ嫁は松へ逃げ
嫁逃げたその夜はしかも星月夜

しんこんにてつして嫁は十三里

やつあたり鎌倉さして女房行き

ついそのように駈け出す松ヶ岡

松ヶ岡江戸の内から聞いて行く

いくぢないなりで聞きく十三里

鎌倉へ嫁歩いてても歩いても

六郷でやうく嫁をとらまへる

其船ここへといふうち追手来る

九里あるよ急がつしやいと渡し守

渡し場で松の模様と追手きく

長追ひ無用と六郷からかへり

十三里義理で旅立つ両隣り

こつちへは来ぬと里から騒ぎ出し

占ひに南と出れば松ヶ岡

すは鎌倉の大事ぞと仲人来る

すは鎌倉と股引で五六人

松ヶ岡奈良茶のまゝとがつくし（川崎）

女房をしばって奈良茶喰って居る

松ヶ岡までに饅頭二つ喰ひ（鶴見）

松ヶ岡だと饅頭屋見ぬいたり

焼餅坂で尼寺の道をきゝ（国境い）

運のなさ焼餅坂で追つつかれ

はなれ山とは吉左右な松ヶ岡（大船）

せきこんで去り状の出る寺ときき

縁切りと見たで東慶寺を教へ

あとを見いゝ東慶寺尋ねてる

急ぎ候ほどにあそこが東慶寺

尼寺ををしへ雲助百もらひ

道筋はくもがをしへる松ヶ岡

ゑんまのてうをかけ抜けて尼になり

尼寺を四五丁にしてとつらまり

円覚寺前にて嫁をつかまへる

うろたへた女、五山をあっちこち

谷七郷まごつて嫁あるき

から駕籠で追手の戻る松ヶ岡

情のこわさうなのが入る松ヶ岡

三分しょしめて鎌倉の戻り駕籠

追いついたところが顔を見たばかり

松風の音で寄せ手を吹戻し

くやしくば尋ね来て見よ松ヶ岡

まだいびりたくば鎌倉までおいで

十三里先きで男をそしってる

今よい駆込があつたと掃いてゐる

ぬれた袖、嫁、鎌倉の松で干し

鎌倉の松に三年身をかくし

三年は在鎌倉と覚悟する

たった三年遁世を嫁はする

状一本とるに三年嫁かかり

手の切れるまで鎌倉に居候

仇に夜を干ほど明かす松ヶ岡

三年の断ち物をして縁を切り

みんなしていびりましたと松ヶ岡

わつちがも行くとぶつサと松ヶ岡

松ヶ岡摺子木疵を受けて行き

外科などにかかったもある松ヶ岡

揉上げのあとをほめ合ふ松ヶ岡

尼たちに毎朝嫁はくさがらせ

ばちの手に撞木は惜しい松ヶ岡

江の島も嫁鎌倉にゐて忘れ

松ヶ岡大工に番をつけておき

松たけのありそうでない松ヶ岡

松ヶ岡似たことばかり話し合

松ヶ岡女だてらの会所なり

お前もかわたしも九サと松ヶ岡

これ故とゑくぼ突き合ふ松ヶ岡

一人づつ鏡借り合ふ松ヶ岡

松ヶ岡ともに語るも会者定離

惜しいかなむだ花の咲く松ヶ岡

松ヶ岡目と目見合はす猫の恋

松ヶ岡女房になった人ばかり

松ヶ岡院主ばかりは無疵なり

つま持たぬ身もましかやと尼公いひ

松ヶ岡月のさわりもあるお寺

みどり子もあるに不埒な松ヶ岡

悪縁さ松のみどりをおいて行き

みどり子にひかされお松立ち帰り

むつまじく夫婦づれにて松ヶ岡

ここにけつかると見て行く松ヶ岡

松ヶ岡三年おけば用に立ち

帯代と書いた手で来る離縁状

尼寺へ来て悪筆をひったくり

何よりの記念名主が判を押し

ほねが折れましたと渡す離縁状

三年のうちに齒もはげ眉も生へ

尼寺へ行ってわが身にして帰り

三年目世間も晴れるあま上がり

松ヶ岡ニコく出ればベソく来

江の島へとでもで詣る三年目

こゝを来る時の怖さと三年目

二度目には娘で通る渡し舟

三とせ見ぬうちに相模の言葉なり

いゝ見切りつづれたを聞く三年目

十三里帰って琴の師匠なり

その他多数

天保より慶応までの東慶寺への駄入女の出身地は、江戸府内を中心として相模国、武蔵国、下総国、上総国、安房国、常陸国、上野国、信濃国に及んでおり、関東一円の広域に周知宣伝されていた。

東慶寺の中門より上は厳重なる男子禁制である。中門より上は東慶寺に居住する女人には、尼僧、逗留女、内済離縁後逗留女、寺法入寺女など各種の女人が在住し、その在寺中の規矩は独自に定められていた。

逗留は縁切とは別扱いである。寺預りの女である。滞在とも寺留ともいう。心願といって、大体親が願って一定期間寺へ預けるのである。東慶寺を縁切寺と呼んでしまうと、そうした女の入る所がないから、井上禅定師は、駄入寺と呼ぶほうがよいと言われる。

江戸時代、縁切の俗信について、高梨公之氏は『日本婚姻法史論』で、縁切榎、縁切絵馬、縁切櫓、縁切稲荷、縁切地藏、縁切薬師、縁切石、縁切橋、縁切廁等をあげておる。石井良助氏の研究の中にも縁切奉公のくだりが見えるが、上州前橋藩では、夫を嫌う妻が家中の藩士の家に駄込み、三年間奉公することによって改嫁でき、また八王子の千人同心の頭、千人頭のもとに女が駄込み、三〇五年たつと離婚となる慣行があった。縁切寺法にも似た注目すべき慣行であった。結局勢家の権力にささえられて断縁の目的を達しようとしたものである。

縁切寺・駄入寺が、法制の領域で有名になったのは穂積重遠博士らの研究によるものであった。縁切寺が制度とし

て定着するについては、もとより宗教的なアジュール権が強くはたらいっていたものであるが、その発想をささえる基盤のうちには、あるいは縁切榎などによってあらわされる縁切の俗信がひそかに作用し、俗信への期徴が絶えず、一般的であって、それがある時権力によって部分的に公認され、制度化されたとも考えられる。縁切の俗信が、断縁の力を欠く者にすがることになり、またそれに対する世の要望も潜在し、出世間を旨とする仏教の力で組織され、高調されると、世俗の法では無視されている弱き者、女人の断縁請求がかすかに力弱くではあるが組織化されて権力の容認をうけるものに変化する。そこに、縁切寺を成立させる深層の基盤があったものと思われる。

実に、わが国慈善救済史上における東慶寺の女人救済寺法は高く評価されるものといわねばならぬ。